

古典文法 助動詞① 「き、けり」

き	「過去」――た	「き・けり」の違い き Ⅱ 「経験」 けり Ⅱ 「伝聞」	「過去」 「過去」
けり	「過去」――た、たそうだ 「詠嘆」――だなあ、だよ、ことよ	詠嘆の「けり」 「和歌(俳句)」 「会話」 「なりけり」	

【練習1】傍線部を口語訳し、そこに含まれる助動詞「き、けり」を文法的に説明せよ。

(例文)風波やまねば

(口語訳)止まないいで (文法的説明)打消の助動詞「ず」の已然形。

1 京きやうより下くだりし時ときに、皆人子みなひとこども無なかりき。

京の都から土佐の国に――時には、誰も子供が――。〈土佐〉

2 此この所ところに住すみはじめし時ときは、あからさまと思おもひしか
ど、今既いますでに五年いつとせを経へたり。ど 逆接の接続助詞。――けれども

ここに住み始めた時は、ちよつとの間と――、今では既に五年が経った。〈方丈〉

3 世よの中なかに絶たえて桜さくらの無なかりせば春はるの心こころはのどけか
らまし 無なかり「無し」の連用形 ば 順接仮定条件の接続助
詞。もし――ならば

この世の中に、もし全く桜が――、春を過すごす人々の心はのどかであるだろうに〈古今・春〉

4 「あなや。」と言いひけれど、神鳴かみなる騒さわぎにえ聞きかざりけり。
ど 逆接の接続助詞。――けれども

(鬼に襲われた女は)「きやあ。」と――、雷の大きい音のせいで、屋外の男は聞くことができなかった。〈伊勢〉

5 此これを聞ききて、かぐや姫ひめ少すこしあはれと思おもしけり。
思おもふ「思ふ」の尊敬語。お思いになる

これを聞いて、かぐや姫は少し気の毒だと――。〈竹取〉

6 今いまは昔むかし、竹取たけとりの翁おきなといふ者もの在りあけり。

7 山里やまざとは冬ふゆぞ寂さびしき勝りまさける人目ひとめも草くさもかれぬと思へば
勝るかちつる・深まる

8 忍しのぶれど色いろに出いでにけり吾わが恋こひは物ものや思ふおもと人ひとの間
ふ迄まで 色いろ 顔かほ 色いろ に 完了の助動詞「ぬ」の連用形。―てしまふ

9 世よをうみの泡あわと消えぬる身みにしあれば恨うらむる事ことぞ数かず
無なかりける 数無し 数え切れない・無数だ

10 遥はるかの底そこに叫さけぶ声こゑ仄ほかに聞きこゆ。守かうの殿どのはおはしま
しけり。「など言いひて待まち叫さけびするに、
守の殿（主君である）国司殿 おはします「在り」の尊敬語。
（生きて）いらつしやる

11 「此この旅籠はたごこそ軽かろかりけれ。守かうの殿どのの乗のり給たまへらば、
重おもくこそあるべけれ。」と言いへば、
旅籠かご かごこそ 強意の係助詞。特に訳さない

12 「用よう無なきありきは由よし無なかりけり。」とて来こずなりにけり。
由無し つまらない

今となつては昔の話だが、竹取の翁という者が――。〔竹取〕

山里は冬は格別に――。人の訪ねて来ることなくなり、草も枯れてしまふと思うと。〔古今・冬〕

隠していたけれども、やはり――、私の恋心は。物思ひをしているのかと人が聞くほどに。〔拾遺・恋〕

あなたとの恋の関係がづらいので（憂み／うみ）、「海」の泡のように消えてしまふような我が身であるので、あなたを恨む事も泡のように――。〔後撰・恋〕

遥か遠くの谷底で（国司が）叫ぶ声がかすかに聞こえる。家来たちは「――」。などと言つて返事を叫んだところ（今昔）

（谷底からかごを引き上げながら）「――」。国司殿が乗っていらつしやるならば、重いはずなんだが。」と言うと（今昔）

熱心でない人たちは、「（誰とも結婚する気のないかぐや姫の家まで）無駄に（気を引こうと）歩きまわるのは、――。」といつて、来なくなつてしまった。〔竹取〕

13 此の楫取りは、日もえ計らぬ乞食なりけり。

乞食 愚か者・とんでもない奴 なり 断定の助動詞「なり」の連用形。―だ・である

14 世には斯かる痴の者も在るなりけり。

痴 愚か なり 断定の助動詞「なり」の連用形。―だ・である

15 月のいと花やかに差し出でたるに、「今宵は十五夜な

りけり。」と思し出でて、

なり 断定の助動詞「なり」の連用形。―だ・である

16 「朕をば謀るなりけり。」とてこそ泣かせ給ひけれ。

謀る だます なり 断定の助動詞「なり」の連用形。―だ・である

この船頭は、天気もすっかりと予測できない――。〈土佐〉

世の中には、この様な――。〈今昔〉

月が一際美しく空に出ているので、光源氏は「――。」と思ひ出しなさって〈源氏〉

花山天皇は、「（藤原道兼は）私を――。」といってお泣きになった。

【練習2】「き、けり」の用法の違いに留意して、空欄にどちらかの助動詞を活用して補え。

後徳大寺大臣の、寢殿に鳶居させじとて縄を張られ

たり[1]を、西行が見て、「鳶の居たらむは何かは

(連体形)

苦しかるべき。この殿の御心さばかりにこそ。」

とて其の後は参らざり[2]、と聞き侍るに、綾小路

(終止形)

宮のおはします小坂殿の棟に、いつぞや縄を引かれ

たり[3]ば、かの例思ひ出でられ侍り[4]に、

(已然形)

(連体形)

「誠や、鳥の群れ居て池の蛙を取り[5]ば、御覧

(已然形)

じ悲しませ給ひてなむ。」と人の語り[6]こそ、さ

(連体形)

てはいみじくこそと覚え[7]。徳大寺にも如何な

(已然形)

る故か侍りけむ。

昔、後徳大寺の大臣が、寢殿に鳶を止まらせまいとして、縄をお張りになった**たそうだが**、それを西行法師が見て、

「鳶が止まっても、どうして困ることがあるだろうか。このお方の度量は、これ程のものなのだろう。」

と言つて、その後は大臣邸にうかがうことが無くなつた**たそうだ**と聞いていますが、最近も綾小路宮がいらつしやる小坂殿の屋敷の屋根に、いつだったか縄をお引きになつたので、あの徳大寺の先例も思い出されたのです

が、
「たしか、カラスが多く止まって、池のカエルを取つて食べた**たそう**なので、それを 御覧になつて悲しく思ひになったからだと聞いてますよ。」

と、ある人が私に語つたので、それではすばらしいことをなさつたのだと思われたのだった。昔の徳大寺の大臣の場合でも、何か理由があつたのてしうか。
〈徒然〉